

風刺画のコミュニケーション力 — 『エコノミスト』(The Economist) の表紙 —

袖川裕美

はじめに

イギリスの政治経済誌『エコノミスト』(The Economist) は、英米の知識層からの支持も高く、特にその表紙の風刺的センスには定評がある。世界には他にも毒の効いた諷刺画を表紙にするものはあるが、使用言語の制約などから読者数が限定されることが多い。たとえば、デンマークの高級誌である『ユランズ・ポステン』(Morgenavisen Jyllands-Posten) が 2005 年にイスラム教の預言者ムハンマドの戯画を掲載し、世界的な抗議運動の原因となったが、発行部数は国内最多であってもデンマーク以外では読まれることは少ないものだった。

一方、『エコノミスト』は世界に読者を持つグローバルな“週間新聞”である¹。にもかかわらず、無難路線を取ることはなく、終始一貫してウィットと毒の効いた諷刺性を前面に出している点に特徴がある。『エコノミスト』自身、この点を自負するところがあり、「編集者が選ぶ 2015 年を決める 10 枚の表紙」といった試みを発表したりしている。また、来年の予想を表紙で表現する企画が毎年行なわれていて、これには世界中の論者が読み解きを試みている。さらに、注目を集めた表紙画があると、専門家・一般読者を問わず、ネット上でさまざまな論評が飛び交うことから、表紙への関心の高さがうかがえる。

しかしながら、日本では公的図書館でも『エコノミスト』を置いていないところが散見されることから、『エコノミスト』及びその表紙に対する日本人の関心が高いとはいえないと思われる。そこで、本稿の目的は、地域別に特

徹的な図柄を取り上げて、その意味するところを読み解き、読者へのコミュニケーション力を確認し、合わせて日本人読者の関心を促すことにある。

絵や図の選定は、世界を俯瞰するため、アメリカ、ヨーロッパ、ロシア、中国、日本をそれぞれ一括りとした。南米やアジア、アフリカ諸国、ITなどの個別テーマでも面白い作品が多数あるが、ここでは日本のニュースにもしばしば登場する世界の「主要国」に焦点を当てた。

まずは、イギリスの EU 離脱決定で世界に激震が走ったばかりなので、ヨーロッパから始めたい。

1. ヨーロッパ

1. 1. 悲劇の分裂

イギリスで、2016年6月23日に、EUからの離脱の是非を問う国民投票が行われた。投票の実施を決めたデーヴィッド・キャメロン首相は、EU残留支持者だが、EUに対しては主権回復のための条件交渉を進めつつ、一方で、国民投票によって、保守党内に長年くすぶる EU 懐疑派を抑え込むことを目的としていた。つまり、イギリス国民として EU 残留の意思を明確にすることを目指していた。だが、離脱派と残留派の議論は沸騰し、直前には残留派のイギリス下院議員が殺害される事件まで発生。国民の支持は拮抗したが、結果は、僅差とはいえ、大方の予想をくつがえす EU 離脱派の勝利となった。

ここ数年、EUは、域内の経済格差（南欧と北欧の違い）、難民・移民問題、イスラム過激派組織 IS「イスラム国」のテロなどによって、人・モノ・金の自由な移動という根幹が揺さぶられてきた。こうした中、経済の恩恵を受けていないと感じるイギリス国民の半数が、EU加盟による利点より、不利な点（難民受け入れや規制などで仕事を奪われる）のほうが大きいと判断したのだった。一方で EU への拒否感というより、既存の政治への拒否感という分析もある。



図1 2016年6月25日

「悲劇の分裂」

イギリスの国旗、ユニオンジャックが真ん中で引き裂かれている。興味深いのは、描かれたのが EU との分裂ではなく、国内の分裂である点だ。スコットランドが早くも、イギリスからの独立の是非を問う住民投票を行なうと言い出している。

1. 2. 出シリア記

次に、イギリスが EU 離脱にいたった経路をさかのぼってみる。図2と図3は、ヨーロッパにおける難民・移民危機の実態を端的に示した写真であり、イラストである。

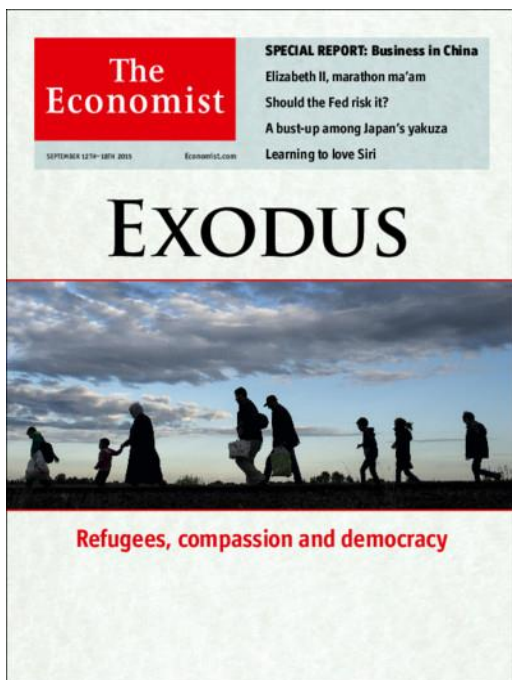


図2 2015年9月10日

「出シリア記」

「難民、慈悲、民主主義」

ヨーロッパには、紛争の続くシリアやアフガニスタン、アフリカ大陸などから難民・移民が殺到している。特に2011年に紛争が始まったシリアからの難民は突出して多く、すでに400万人を超えている。そのため、図2

の表題は、旧約聖書の“Exodus”（出エジプト記）におけるイスラエル民族のエジプト脱出ならぬ、シリア人の「出シリア記」となるろう。

1. 3. 難民・移民危機にどう対処するか

図3の“tear apart”（分断、引き裂かれる）という言葉が、図1の“split”（分裂）を予期しているかのようだ。また、この図は、図2の絵柄と呼応し



ているが、図3に至っては、難民・移民問題は、もはや人類愛や民主主義の問題ではなく、深刻な危機であることが切迫感をもって伝わってくる。

図3 2016年2月6日

「難民・移民危機にどう対処するか」

「ヨーロッパを分断させないためには、どうしたらいいか」

1. 4. ヨーロッパ経済、ただ休んでいるだけです

さらに遡って、今日のイギリスのEU離脱が予見されるような一枚を紹介したい。図4は、2014年末に向かうヨーロッパ経済を諷刺的に描いたものだ。脚にEU旗（青地に星）のテープを巻いたオウムが、ひっくり返り、通貨ユーロの点滴（＝資金注入）を受けている。具体的にはヨーロッパ中央銀行（ECB）が直前に利下げを行なっている。その後、ECBのマリオ・ドラギ総裁は“whatever it takes to save the single currency”（ユーロを守るためなら何でも）やると宣言し、実際に2015年1月に量的緩和を始めた。しかし、オウム

の隣に立つ、ヨーロッパ最大の経済国ドイツのアンゲラ・メルケル首相は、こうした状況を重大視しないかのように“*It's only resting...*”（オウムは）ただ休んでいるだけです）と言っている。

だが、メルケル首相はオウムに比べて小さくしか描かれていないし、表情も暗い。状況が安閑としていられないことは明らかである。ちなみに、同号の記事“*The world's biggest economic problem*”（世界最大の経済危機）によ



ると、この時点ですでにドイツ経済は停滞し、ユーロ圏全体のインフレ率も 0.3% と低く、南欧の若者の失業率(特に若者の)は 40% にも達している。

図 4 2014 年 10 月 25 日

「ヨーロッパ経済」

「ただ休んでいるだけです」

さらに図 4 を別の角度から読み解くと、そもそもメルケル首相の台詞は、イギリスのコメディ番組『空飛ぶモンティ・パイソン』(Monty Python's Flying Circus, 1969-1974) 第 1 シリーズ第 8 話で放送されたスケッチ・コメディ(笑いを題材とした寸劇)の『死んだオウム』(The Parrot Sketch / Dead Parrot, 1969)をベースにしている²。ペットショップを舞台にしたこのスケッチでは、客が、店で買ったノルウェーブルーのオウム(Norwegian Blue parrot)が死んでいたと苦情を言いに行くと、店員が“*It's not dead. It's resting. It's just resting*”（死んでなんかいない、休んでいるんだ、ただ休んでいるだけです）と言い張って、押し問答となる。

この番組はイギリスだけでなく、欧米全体に影響を与えたコメディ番組で、このスケッチは特によく知られた作品である。多くの読者は、この表紙を見

ただで、何をベースにしているか理解できるのであろう。経済危機を前に、毒の効いたコメディ番組を基に諷刺画を描くセンスは『エコノミスト』ならでは、といえる。読者もまた、これを笑いながら楽しむのである。

また、欧米の文化圏ではオウムは内面の真実を告げる象徴とされることから、人々の本当の声が伝えられなくなっているということか。エキゾチックな美を持つオウムが瀕死状態ということは、EU という特異な試みが危ういということでもあるか。今日の状況を見ると、きわめて示唆的である。

2. アメリカ

2. 1. 前途多難

『エコノミスト』の表紙に描かれるバラク・オバマ大統領の表情は、総じて暗い。図5は大統領に初当選する前の写真であるが、その表情はすでに厳しく、“The hard road ahead”（前途多難）というタイトルがついている。その



後も、眉間に皺を寄せている苦悩の表情が多く、前途多難は現実のものとなっていった。

図5 2008年8月23日

「前途多難」

2. 2. さあ、共和党を抱きしめて

再選を果たした後の 2012 年 11 月 10 日号の表紙 (図 6) は、ミシェル夫人と抱き合っ



て再選の喜びを分かち合う、珍しく明るい表情のオバマ大統領の
写真が使われているが、タイトルは “Now, hug a Republican” (さあ、共和党を抱きしめて) である。『エコノミスト』は、抱きしめるべき相手は夫人ではなくて共和党だろう、ここで共和党を取り込み、懐柔しないと大変なことになると言っているかのようだ。

図 6 2012 年 11 月 10 日

「さあ、共和党を抱きしめて」

2. 3. かつて水の上を歩いた男

しかし、その助言も虚しく、共和党との関係はついに融和することなく、図



7 では、オバマ氏はむっつりと口を一文字に結び、海に沈んでいく。シリア内戦への介入に及び腰、エドワード・スノーデン元 CIA 職員によるアメリカ国家機密暴露、オバマ政権の目玉である医療保険改革 (オバマ・ケア) への根強い反対など、オバマ政権は内憂外患に絶体絶命の様相である。

図 7 2013 年 11 月 23 日

「かつて水の上を歩いた男」

この図のタイトルは“**The man who used to walk on water**” (かつて水の上を歩いた男)である。これは新約聖書「マタイによる福音書」第 14 章第 31 節に描かれた、湖水の上を歩くイエス・キリストの奇跡がベースにある。オバマ氏は彗星のごとく現れ、アメリカ初の黒人大統領となった。「核なき世界」を訴え、ノーベル平和賞まで受賞した。これは「水の上を歩く」奇跡だった。

しかし、その後は決断力不足を指摘され、この号が出された当時のオバマ大統領は、不支持率 54%、支持率 39%と最悪の状態である。求心力低下は明白で、すでに「レイムダック (死に体)」と言われ、まさに沈没寸前だった。

ところが、政権も末期に近づいてきた 2015 年末頃から、オバマ氏への支持率は回復。CNN/ORC によると、2016 年 6 月に行なった世論調査では支持率は 52%となり、大統領二期目の同時期のロナルド・レーガン氏やビル・クリントン氏を上回っている。

次期大統領選が近づく中、民主党のヒラリー・クリントン大統領指名候補と、共和党のドナルド・トランプ大統領指名候補の泥仕合が続き、大統領はどちらがいいかではなく、どちらが嫌いかで選ぶとまで言われている。このような混沌状態で、振り返れば、オバマ氏のほうが遥かに政治家らしく、米国最高の権威にふさわしいし、経済も失業率は 5%以下で堅調に推移しているとの理由から、オバマ氏を評価する声が高まっているというのだ。

この後、アメリカの政治は次の大統領に引き継がれるが、退任したオバマ氏が次に『エコノミスト』の表紙を飾る時は、どのように描かれるだろうか。

また参考として、現在オバマ大統領の専属カメラマンであるペート・ソウザ(Pete Souza)氏が 2016 年 6 月に BBC ワールドニュースのインタビューで語ったことを付け加えたい。オバマ氏は子供を相手にしている写真に素晴らしいものが多いが、大統領および人物としての全体像を描くためには、政権運営に苦しむ姿だけでなく、「イスラム国」IS への対応に苦慮し、銃乱射事件の被害者とともに嘆き悲しむ姿も必要である。つまり、『エコノミスト』の表紙に現れたオバマ氏は、あくまでも人物の一面にすぎないということにもなる。フォトジャーナリストの貴重な発言である。

3. ロシア

3. 1. ロシア再浮上

『エコノミスト』の表紙に登場するロシアのウラジーミル・プーチン大統領も、オバマ氏と同じく眉間に皺を寄せているものが多いが、こちらは強面である。オバマ氏と違って、プーチン氏は長年権力の座にあって、国内では一貫して高い支持率を維持してきた。厳しい表情である必要がなさそうだが、旧ソ連内の国々や欧米諸国との関係において温和な顔などしてられないのか。『エコノミスト』あるいは、いわゆる西側がそう捕らえているのか。興味深いところである。



図8 2008年8月16日

「ロシア再浮上」

「西側はどう対応すべきか」

この図は、2008年8月のロシアによるグルジア（現在は「ジョージア」と日本語名を改称）攻撃が描かれ、冷徹な顔をしたプーチン大統領が指示している。

戦闘の発端は、グルジア軍が、ロシア支配下の南オセチア地区（国際的にはグルジア領とされる）に軍事攻撃を行ったことだ。ロシアはこれを受けて、ただちに南オセチアに派兵、グルジア領内への爆撃も開始した。

表紙の右下はロシア軍が描かれ、左下の破壊された建物はグルジアのゴリだという。戦闘は停戦合意を経て終結するが、ロシアは、南オセチアとアブハジア（1999年に独立宣言をしたグルジアの黒海沿岸地域。アブハジア自治州政府はグルジアの首都トビリシへ移転し、亡命政府となっている）の独立を承認。戦闘の前にグルジア軍が支配していた地域を含めたアブハジアと南オセチア領内に、ロシア軍を残している。

3. 2. プーチンの終わりの始まり

プーチン氏は 2000 年から 2008 年まで 2 期大統領を務め、その後はメドベージェフ大統領の下で首相職に就いた。さらに 2012 年 3 月 4 日に行なわれたロシアの大統領選で、再び大統領に返り咲いた。憲法改正で大統領の任期が 6 年となったことから、任期満了は 2018 年。さらに次の大統領選に出馬し、再選されれば、2024 年まで在任することになる。

大統領選の前日に出された『エコノミスト』は、表紙にプーチン氏の後姿を載せ、“The beginning of the end of Putin”（プーチンの終わりの始まり）と



書いた。前年の下院選挙では不正が指摘されていて、同号の記事は「ロシア国民はプーチン氏による個人化されたシステムにうんざりしている。正当性のある組織・制度を求めるロシア人が増えている。政権交代があることを知りたいのだ」と書いた。だが、結果はプーチン氏が当選した。

図9 2012年3月3日

「プーチンの終わりの始まり」

この後も、ロシアの主要財源である原油価格が下落し、政権のきしみが表面化するかと思いきや、ウクライナ問題が発生するとともに、強いプーチン氏への支持率は80%を超え、磐石の感がある。後年、プーチン政権が終わる時に、どこを「プーチンの終わりの始まり」とするのか明らかになるであろう。

3. 3. プーチンの対西側戦争

2014年のウクライナの政変で、親ロシアのヴィクトル・ヤヌコヴィッチ政権が崩壊して親米派の暫定政権が発足すると、ロシアは、ロシア系住民が多数を占めるクリミア半島（ウクライナ領）に軍事介入した。その後、クリミア自治共和国とセヴァストポリ特別市で行なわれた住民投票の結果、両地域は多数の支持を得て、ロシア連邦に編入された。

続いて、ロシア系住民の多いウクライナ東部でも、ウクライナから独立・高度な自治を求める動きが活発化し、戦闘が続く。ロシアはこちらにも軍事介入。もともとウクライナの東部と西部は、親ロシアと親欧米に分かれている。東部は地下資源が豊かで、西部はチェルノブイリ原発事故の負の遺産があり、ウクライナは東部を手放しては立ち行かない。



一方、ロシアはウクライナへの軍事介入によって、欧米から制裁を受けている。東部と西部、ロシア、ドイツ、フランスとの間で、たびたび停戦協定が結ばれるが、和平は見えていない。

図 10 2015年2月14日

「プーチンの対西側戦争」

『エコノミスト』の同号の記事では、プーチン氏が恐れるのは、武器よりも欧米の制度や価値観で、これが国内に浸透すると中から瓦解するので、なんとしても阻止したい、究極の標的はEU（ヨーロッパ連合）であり、NATO（北大西洋条約機構）だという。図10は、そうしたプーチン氏が「西側」を操ろうとしているというものだ。

4. 中国

アメリカと並んで、世界の二大大国となった中国は『エコノミスト』の表紙にしばしば登場する。たとえば、ここに掲載した3枚の表紙を見ただけで、ここ数年の中国の変化がうかがえよう。

4. 1. グレート・ウォール・ストリート

2008年の金融危機後、世界は中国の巨額の財政投融資によって金融危機脱出の糸口をつかんだ。以降、中国の人権問題にも海洋進出にもサイバー攻撃にも目をつむり、経済力に頼るといのが世界の趨勢となっている。それを端的に表すのが図11である。“Great Wall Street”は、万里の長城“Great Wall”とニューヨークの金融街ウォール街“Wall Street”をかけた言葉で、世界を席



巻する中国の金融機関の力を示す。副題は、“The rise of China’s banks”（中国の銀行の台頭）。この時点で、世界のトップ10銀行のうち、中国の銀行は4行を占めている。

図11 2010年7月10日

「グレート・ウォール・ストリート」
「中国の銀行の台頭」

万里の長城は、秦の始皇帝の時代に建設が始まり、その後2000年以上にわたり造成が続けられた。北方の異民族の侵入を防ぎ、中国の権勢を象徴するものであることを思えば、この絵解きは容易である。また、壁にATMが描かれているのは笑いを誘う。

4. 2. 中国の繁栄のパラドックス

こうして、中国は経済超大国の立場を確立し、軍事力でも脅威を与える存

在となった。政治的には共産党一党独裁でありながら、市場経済を追求する国家資本主義により、世界がうらやむ経済成長を遂げてきた。しかし、チベットなどの民族問題、都市と地方の格差、言論統制など社会のきしみが表面化する。

図 12 の合成写真はそうした矛盾を象徴するものである。上部は山水画に見られる中国の絶景。下部は、一見したところ、それが水面に映ったもののように見えるが、実は上海の高層ビル群のシルエットであろうか。船の船頭も、水に映る影はビジネスマン風に変形されている。見事なデフォルメ写真である。



見られる中国の絶景。下部は、一見したところ、それが水面に映ったもののように見えるが、実は上海の高層ビル群のシルエットであろうか。船の船頭も、水に映る影はビジネスマン風に変形されている。見事なデフォルメ写真である。

図 12 2012 年 1 月 28 日中国特集号
「中国と繁栄のパラドックス」

4. 3. すべてコントロール下にある

図 13 は写真を使わない完全な諷刺画である。目をむき、火を吹きながら一気に下降していく暴れ龍（龍は中国では皇帝の象徴）に乗った中国の習近平国家主席が、振り落とされまいと手綱を取っている。その「心」は、人民元や市場が不安定化し、経済減速が鮮明になる中、習近平氏も実は戦々恐々としながらも “Everything’s under control.”（すべてコントロール下にある）と嘯（うそぶ）いているというものだ。

経済成長を謳歌してきた中国ではあるが、習近平国家主席はテレビに映る時も『エコノミスト』の表紙を飾る時も、つねに無表情である。だが、図 13



の習氏は容赦なく茶化されている。深刻な表情で問題を提起する習氏を出さないことで、むしろ中国の成長神話が終わったことを明示しているとの解釈もある（シンクタンク Global Policy Institute の Schirach Report による）。

図 13 2016 年 1 月 16 日

「すべてコントロール下にある」

「中国、人民元、マーケット」

また、「コントロール下（アンダー・コントロール）」について、一言、私見を述べたい。2020 年オリンピック招致のための最終プレゼンテーションで、安倍晋三首相が福島第一原発への懸念を払拭させようと、世界に向けて「状況はコントロール下にある」“The situation is under control”と宣言した。汚染水に関しては打つ手がないため、東京オリンピックの開催は朗報でも、この発言は行き過ぎとの声も上がったが、この発言が功を奏したのか、東京オリンピックの開催が決まった。福島原発は現在もアンダー・コントロールとは言えないが、オリンピック開催決定の興奮の中で、批判は影を潜めていった。

しかし、筆者はこの表紙を見た時に、直観的に世界はこの発言を忘れていないと思った。表紙自体は中国を揶揄し、皮肉るものだが、安倍首相がコントロール下でないものをコントロールされていると言ったことで、諷刺画に借用されたのではないかと考える。

5. 日本

5. 1. フォールアウト

『エコノミスト』の描く日本は、やはりというべきか、日の丸と富士山を使った意匠が多い。

図14は、2011年3月11日に起きた東日本大震災直後に出された『エコノミスト』の表紙だ。日本を象徴する「日の丸」が坂道を転がり落ちていくのを、数人で体を張って支えている。放射線防護服を来た人や、鉱山作業員のような軽い装備の人たちである。福島第一原発の作業員ではないか。



タイトルは “The Fallout” (フォールアウト)。字義は「外側に落ちる」。日の丸があるべき場所から外れて落ちていく。さらに、そのものズバリ「放射性降下物、死の灰」を指す。また、「副産物」という意味もあるので、大震災の副産物としての原発事故という意味合いもあろうか。

図14 2011年3月19日
「フォールアウト」

この画は、国の存続を危うくするほどの大災害・事故にあつて、真の救済者は無名の作業員だったことを伝えている。ここには大地震や津波の直接的表現としての絵も言葉もない。そのため、この表紙は一般読者には理解しにくいとの批評もある (Gaelle Mehanna 氏) が、直接的表現を避けたことで、逆に読者の感性と知性に訴えた作品である。エコノミストのメッセージは通常ウィットがきいていて、大胆なものが多いがこれは違う。しかし、強いメッセージが説得力をもって伝わってくる。コミュニケーション力の高い一葉である。

5. 2. 中国と日本は、これのために本当に戦争するのか？

図 15 には尖閣諸島（中国名・釣魚島）が写され、中国と日本は、“Could China and Japan really go to war over these?” [これっぽちの]島のために本当に戦争する気か？)

という問いが投げかけられている。それに対して、手前の亀が “Sadly, yes.” (残念ながら、そうなんだ) と答えている。日本人でも尖閣諸島がどういふところなのか、ほとんどの人は認識していないのではないか。図 15 は客観的な島の姿を見せることで、戦争のバカバカしさを伝えている。また、これは、海外が尖閣の問題をどう見ているかを示すものでもある。



なお、中国の伝承では、亀はさまざまな霊力を持ち、長寿であることから未来予知能力があるとされている。そのため、古代中国では亀ト（占い）が行われた。この絵の亀トが当たらないことを願う。

図 15 2012年9月22日

「中国と日本は、これのために本当に戦争するのか？」

「残念ながら、そうなんだ」

5. 3. 鳥か？ 飛行機か？ いや日本だ！

安倍政権がアベノミクスの三本の矢を打ち出し、日経平均が上昇を始めた頃に、スーパーマンの姿をした安倍首相が表紙に描かれた。胸にはスーパーマンの S ではなく、円マークがついている。同号の記事も、通常辛口の『エコノミスト』としては、首相を評価している。安倍首相自身、スーパーマンに例えられたことに悪い気はしなかったようであり (twitter)、日本の専門家の多くも、これを素直に喜んだ。

だが、この表紙を見て、日本および安倍首相が評価されていると解釈できるのか、個人的には疑問である。それを裏付けるように、『エコノミスト』のジョン・ミクルスウェイト (John Micklethwait) 編集長の言葉が引用されていた(『現代ビジネス』)。「円安・ドル高で景気が浮揚したので、Sのマークを円に換えて表紙にした。アベノミクスについては、一定の評価をしているが、あくまでも公約をどこまで実行できるかで、真の評価は決まる」と述べたという。また、同論評は、スーパーマンの両脇に2機の戦闘機が描かれていることにも注意を喚起している。「ナショナリズム、中国への挑戦」という副題



があることから、政権の右傾化への懸念もメッセージに込められていると見るのは妥当だろう。

図 16 2013年5月18日

「鳥か？ 飛行機か？ いや日本だ！」
「アベノミクス、ナショナリズム、中国への挑戦」

結論

以上 16 枚の表紙から、過去数年の世界情勢を追ってみた。わずかこれだけの諷刺画によって、世界の時流を、ちょっとした笑いとともに批判的・共感的に感じ取れたことと思う。

日本の雑誌の表紙は、大半が人物の写真か、景色、物、花、道具、絵などで占められている。新聞には世相を描く四コマ漫画や、政治を風刺する一コマ漫画(カートゥーン)が掲載されてはいるが、諷刺画は急速に迫力を失っている。衰退の原因は『メディアのなかのマンガ』(茨木正治著、2001年)に詳しいが、編集者の見識の鈍化や漫画家の発想のマンネリ化、政治社会の複

雑化などによって、読者へのコミュニケーション力が衰え、それとともに、読者もメッセージを読み解けなくなっているという。

これは日本だけの現象ではないようだが、日本においては特に漫画の精神の中核要素である「遊び」と「諷刺」が分離され、「遊びとしての機能は肥大化した」、「諷刺」としての機能が弱まっている」(『漫画の歴史』清水勲 iii)。ユーモアと物語は漫画として発展していったが、諷刺は取り残された感が強い。

特に、現在、権威を笑うのは不謹慎であるとの空気が急速に蔓延しているように思われる。個人の関係ならば、思いやりも自制も必要だが、公的存在や公人は、批判やからかいの対象としてよかったはずだ。それが、なぜか今、慮り、忖度、自粛の空気が日本を覆っている。

そうした現状にあって、『エコノミスト』は、“newspaper”（新聞）の顔となる表紙に、人物写真（通常写真・加工写真）、イラスト、漫画などをコラージュ的に組み合わせて、一コマ漫画とも異なる独自のスタイルを築いてきた。表紙が“newspaper”としてのアイデンティティを表現し、読者をひきつけていることは特筆に値する。

本紙の表紙を見ていると、高級パズルのようでもあり、知的遊戯のようでもある。気の利いた江戸川柳のようでもある。ちょっと辛辣なユーモアを味わうことで、息を抜き、自由な発想が得られる。グローバル化を推進する日本が、こうしたセンスを失うことは、グローバルに対応できなくなるのではないかと懸念する。

日本人は古くから、ユーモアや粋を解するセンスがある。浮世絵にも、絵によるなぞなぞの「判じ絵」や「組み上げ絵」などもあった。こうしたセンスを復活させ、日本が言論の閉塞感から解放されて、自由な発想で、諷刺を楽しみ、社会を見る教養に再び目を向けることを期待したい。

また、情報入手の観点や、いわゆる欧米文化に触れるという観点からも、『エコノミスト』を置いていない図書館が散見されることは、日本のグローバル化、知的水準という点で個人的に憂慮している。

グローバル化のなかで、英語は「ツール」という言い方をよく耳にするが、『エコノミスト』の表紙を見ると、歴史・社会・文化に対する理解なくしての言語理解、コミュニケーションはあり得ないことが分かる。外国人として英語を学ぶ際、背景となる歴史や文化のすべてを知ることは不可能かもしれないが、だからといって「言語はコミュニケーション・ツールで事足れり」という発想は、間違いであろう。

最後に、もう一枚秀逸な作品を紹介したい。「髪」にたとえられた経済が、ひょっとして世界のあらゆる問題の根幹かもしれない。

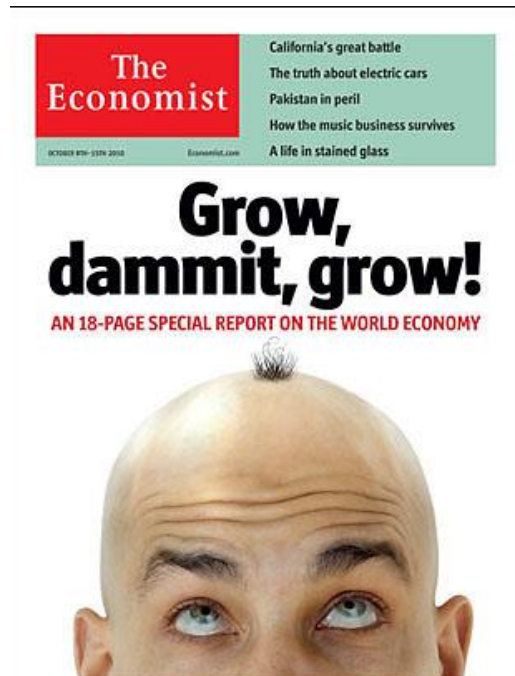


図 17 2010年10月9日

「増えろ、くそ、増えてくれ！」

「世界経済 18 ページ特別レポート」

注

1. 『エコノミスト』は、自身を指して“magazine”（雑誌）ということではなく、事実を報じる“newspaper”（新聞）と称している。日本ではこの点に注視することなく、雑誌として扱っているが、自身は紙面について明確な立場を表明している。
2. イギリスのBBCが制作・放送したコメディ番組。1969年から1974年まで放映。スケッチはパイソングの名作スケッチとして、映画やライブで度々再演されて

いる。日本語の吹き替えも 1976 年から 1977 年にテレビ放映された。この番組は同時代の事件や哲学に敏感に反応し、かつ民族・宗教などでもきわどいネタも多く扱った。そのナンセンスさと毒の強さは、イギリスをはじめ多くの欧米文化に影響を与えたと言われる。

参考文献

飯倉章、『第一次世界大戦史 諷刺画とともに見る指導者たち』、中公新書、2016 年。

茨木正治、『メディアのなかのマンガ 新聞一コママンガの世界』、臨川書店、2001 年。

清水勲、『漫画の歴史』、岩波新書、1991 年。

“江戸の暗号”をさぐる 100 倍拡大！浮世絵 DVD ブック① 日本橋 広重、講談社 MOOK、2012 年。

“江戸の暗号”をさぐる 100 倍拡大！浮世絵 DVD ブック② 富嶽 北斎、講談社 MOOK、2012 年。

“江戸の暗号”をさぐる 100 倍拡大！浮世絵 DVD ブック③ 美人 歌麿、講談社 MOOK、2012 年。

<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/36071>

<http://www.economist.com/node/21684092/print> The Economist’s editors pick the ten covers that define 2015

<http://www.readingthepictures.org/2008/08/russia-resurgent-one-side-of-the-same-coin/>

<http://www.universeofsymbolism.com/parrot-symbolism.html>

<http://www.anagrammy.com/literary/db/poems/db5.html>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/空飛ぶモンティ・パイソン>

https://en.wikipedia.org/wiki/Monty_Python%27s_Flying_Circus

<http://edition.cnn.com/2016/06/24/politics/obama-approval-rating-presidency-cnn-orc-poll/>

<https://shimamyuko.wordpress.com/2016/03/14/>

<https://www.youtube.com/watch?v=wZSyLJYR8Xk>

<http://schirachreport.com/2016/01/16/the-economist-mocking-china/>

<https://gaellemhna.wordpress.com/mcom-202-papers/ml-critical-paper-1/>